

赤川次郎

告別



KADOKAWA

山の中の
それが、不

傑作青春サスペンス

の電話
った……



カドカワ ノベルズ

平成四年八月二十五日初版発行

著者 赤川次郎 あかがわじろう

発行者 角川春樹

告別 こくべつ

印刷所 旭印刷株式会社

製本所 株式会社宮田製本

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二二三 振替東京三一九五〇八
千二三 電話 営業〇三六二七八五二 編集〇三六二七八四三

落丁・乱丁本はご面倒でも小社通信販売課宛にお送り
ください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

©Printed in Japan ISBN4-04-771038-5 C0293

N 5-32

赤川次郎

告別



山の中の山の中の山の中の山の中 山の中の
それが、不それが、不それが、不それが、それが、不
傑作青春サスペンス

ISBN4-04-771038-5

C0293 P760E 定価760円
(本体738円)



1910293007602

KADOKAWA NOVELS

深夜の山中で、車が突然故障してしまったわたしは、近くの電話ボックスへと飛び込んだ。そこから、高校時代の友人へとかけた一本の電話が、二十年前の色あせることのない想い出の中へと、わたしを引き込んでいった……。 (『長距離電話』より)

人は、一生のうちで、いくつもの別れに出会う。ある時は、別れに涙し、またある時は、別れに希望を残しながら別れてゆくのだろう。七篇の〈別れ〉を様々に綴った珠玉の短編集。

KADOKAWA NOVELS

告別

赤川次郎

カバ―絵／北見 隆
本文イラスト／及川達郎

目次

長距離電話

9

自習時間

47

優しい札入れ

67

愛しい友へ……

87

雨雲

125

敗北者

159

灰色の少女

199

長距離電話

「参ったな！」

と、私は言った。

もちろん、そう言ったところで、誰も聞いてはくれない。私の周囲には人っ子一人いなくて……。

夜、まだ深夜というには少し早い十一時ごろではあったのだが、何しろここは山の中の細い間道で、こんな所を他の車が通る見込みは、ほとんどなかったのである。

よりによって、こんな場所で車がいかれてしまふとは。——私が、つい、

「参ったな！」

と、言ってしまったのも、無理からぬことだっ

たろう。

雨が降っていないのがまだしもで、エンジンの中を覗き込んでも、濡れずにすんだ。この前、やはり年老いたエンジンが息切れして、軽い発作（？）を起した時は、どしゃ降りの中で、油まみれになって格闘しなくてはならなかったのだ。

しかも車の中には、疲れ切って、とげだらけのヤマアラシみたいになった女房と、眠りこけた子供がいて、焦りと雨で、もう泣きたくなつたものだ。

今日は私一人だし、多少帰りが遅くなつたところで、女房は気にもしないだろう。どうせ、先に寝てしまっているのだから。

ただ、この前より悪かつたのは車の状態で、どうやったところで息を吹き返しそうになかつたのである。

この山の中、どうしたらいいだろう？ 私は途方にくれてしまった。

——私は小さな商事会社の外回りの営業マンである。この不景気の中、どんなに小さな仕事でも飛びつくようにして我がものにしないで、競争相手にとられてしまう。

そんなことが三回も続けば、私のクビなど、いとも簡単に飛んでしまうに違いない。どんなに馬鹿らしいと思っても、こうして遠い道を、車を飛ばして出かけて来なくてはならないのである。

まあ、ほんの雀の涙ほどの話をまとめて、それでも多少はホッとしながらの帰り道。ちょうど町と町との中間辺りで、車はダウンしてしまった。といって、車を責めるわけにはいかない。

会社の方が、社長のベンツ以外の車を全部売り払ってしまって、我々営業マンはみんな自前の車で回っていたのだ。車がいかれても当然というものだろう。

「さて……。どうするか」

私は、考え込んだ。——単なる勘だが、どっち

かといえ、この先の町の方が、いくらか近いのではないかという気がした。それでも十キロはあるだろう。

歩いて二時間！ 私は、腹も空いていたし、うんざりしたが、他にどうしようもなく、アタッシェケースを車から取り出し、曲りくねった道を歩き出した。

——月夜で、歩くのには苦労しなかった。闇夜だったら、お手上げだったろう。

涼しくて、少々肌寒いくらいだが、これで家へ帰ればムツとするほど蒸し暑いのである。

——仕方ない。ともかく歩くんのだ。

歩いて、歩いて……。何かいいことにでも出くわさないとも限らない。

そうだろう？ 人間、一生の間に一つぐらいは「幸運」ってものにめぐり会う資格があろうじゃないか……。

もっとも、やっと四十だというのに、頭の方は

すっかり心細く透けて来た。この疲れた中年を見たら、「幸運」の方で遠慮してよけて行くかもしれない。

しょうがないだろ。俺だって、好きでくたびれた中年になったわけじゃないよ……。

私は足を止めた。

何だろう？——前方、道がカーブして、その向うに隠れているのだが、何か明りが見えている。

こんな所に家があるのか？ それとも——まさか、ハンバーガーチェーンがこんな場所に出てるわけもないが。

「——まさか」

と、私はそれが目に入る所までやって来て、目をみはって呟いた。

どうしてこんな所に？

私は、しばらくの間、幻でも見ているのではないか、と思いつつ、夜の中でポカッと明るく光を放っている、その電話ボックスを眺めていた。

しかし、いくら目をこすってみても、その電話ボックスは消え去りはしなかった。

何の気紛れか、こんな所にボックスを設置した人間がいるのだ。バスも通っていない間道に。

それにしても——近寄ってみると、何とも昔風の電話ボックスである。最近のやつは、もっと洒落たデザインで、こんな風に完全な「箱」になっていないものが多い。

どうしよう？——電話があつたからといって……。

そうか。JAFに連絡するという手もある。加入していないが、連絡すれば来てくれるだろう。

あのポンコツが動くかどうかは疑問だが、それに、家へかけて——。家へかけて？ 何て言うんだ？

和枝は、夫が、車の故障で困っているからといって、別に何もしてくれやしないだろう。実際、何もできないだろうし。

家からここまで、タクシーなんか飛ばしたら、何千円——いや、何万円もかかるに違いない。

家にかけるのは、電話代のむだつてものだ。

何かいい手はないだろうか？

その時、ふと若井のことを思い出したのは、全くの偶然でしかない。若井……。そういえば、あいつはこの近くから、通っていたのだ。——もちろん学校のことである。

私に通っていた私立の男子高校で、一番家が遠かったのが、若井だった。毎日、二時間かけて通って来ていたものだ。

私は一度、彼の家へ遊びに行ったことがあって、それで憶えていたのだろう。若井の家は、この先の町の、古い酒造家だったのである。

私は、しばらく迷っていた。——いくら、仲のいい友だちだったとしても、もう二十年以上も昔の話だ。向うがこつちを憶えているかどうか。

それに、たとえ憶えていたとしても——いや、

おそらく若井自身、あの生家に住んでいないだろう。きつとどこかの企業に就職して、別の場所に住んでいるに違いない。

電話してみたところで、あの家がまだ存在しているかどうか……。

考えれば考えるほど、電話してもむだだという気持が強まった。しかし——私は丸く開いたドアの穴に手をかけて、ボックスの中へ入り、十円玉しか使えない、旧式の電話のフックから、受話器を外していたのである。

十円玉があったかな？——五枚ある。あの家なら、充分にかかるだろう。

もし、両親でも出れば、若井がどこに住んでいるかも訊ける。この近くでなかったら、何の意味もないが。

番号？——番号はすぐに思い出せたのである。へ1の並ぶ、憶えやすい番号だったから。

「——まあいいや」

